

## < 祈禱会の聖書から >

【**誉と祝福**】詩編8篇が開かれました。なかでも6～7節を中心に見てみましょう。“神に僅(わず)かに劣るものとして人を造り、なお、栄光と威光を冠としていただきせ、御手によって造られたものをすべて治めるように、その足もとに置かれました”という御言葉を頂きました。どんな意味でしょう。その一つ目は“僅かに劣るもの”という言葉が示しています。世界中の教会がそうなのか、私の周囲の教会がそうなのか、信仰を持つということは“苦しいもの”とか“あえて志願して苦しい道を選びとること”という気風が強すぎるということです。しかしここで語られているのはその反対です。

【**天国と黄泉**】ここで語られる神の言葉は、死よりも、はるかに天国に近い、ということです。この“神”ですが、キングジェームス訳聖書では“天使”、ニューインターナショナル版では“天的な存在”と訳しています。黄泉・死に近いとは語っていないのです。ところが私たちは、苦しいことや死に属することに、思いを巡らすのを好むのです。これが二番目のことです。もう一度教会の基礎を思い出さなければなりません。確実に死はやって来る、ということはいくら確認しても教会は成り立ちません。確実な“救済と復活”を礼拝において、確認することによって成り立っているのです。

【**治めるように**】この“治める”という言葉にも深い意味があるようです。“捧げなければならない”とか“犠牲を覚悟しなければならない”という基礎からは“栄光と威光を冠として”という言葉は出てきません。治める義務があるようです、何故かといいますと、“神に近い”からでしょう。どんなにわずかでも神様の思いを知ることができる、主イエスのことを知ることができたなら、神の思いが私たちの内にあることが確認できます。

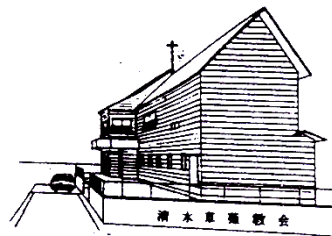
【**救われた者であることをやめる**】ところが、“治めないでおこう”と思いやすいのが私たちです。犠牲者だと決め込んでしまったり、御手の業である美しい世界の破壊者であろうと、あえて思ってしまうのです。先のクリスマスで“ルカ福音書の始めには沢山の讚美が出て来る”ということを見ましたが、讚美が私たちに与えられているのは、滅びより、ずっと救いが近いからです。“神に近い”という告白からは“呪”と“嘆き”は出てきません。

【**我々自身**】“一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです(ローマ書5:12)”とパウロは教えます。神に近い者に、死が攻撃をしているのです。それほど私たちは、天的な存在に近いのです。この身体がそうなのです。祈禱会では、人間の内臓も、十分に尊重されなければならないという事実が出されました。科学的には人の体を“小さな宇宙”という時もあります、それほど、私たち自身は貴重なものとして造られているのです。“わたしの目には、あなたは高価で尊い”とイザヤは43:4で預言しています。肉においても魂においてもそうなのです。

【**命の教会**】私たちの教会は、新年度に進み行こうとしています。残念なことに目をとめ、悲しむでしょうか、それとも、心と体が実は、神に近いのだと、告白する、喜びの群れなのだと、御言葉に聞くことができるのでしょうか。

# 週報

2011年 1月 30日



伝えよう 救い主を  
迎えよう 主の民を

日本フリーメソジスト

## 清水草薙キリスト教会

牧師 村上 定幸

ユース礼拝	毎日曜日	午前 9:00
礼拝式	毎日曜日	午前 10:30
	(聖餐式 第一日曜日)	
夕礼拝式	毎日曜日	午後 7:00
エステル一会	毎水曜日	午前 10:30
聖書研究祈禱会	毎水曜日	午後 7:00
ホームページ	<a href="http://kusanagi.church.jp/">http://kusanagi.church.jp/</a>	

〒424-0885

静岡県清水区草薙杉道3丁目2-26

☎054-345-4070 E-Mail [grace@big.jp](mailto:grace@big.jp)

振替口座 00890-6-214042